



最 新 刊

# 手づくり アンパンマンが いっぱい! 8 イベントあしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 著

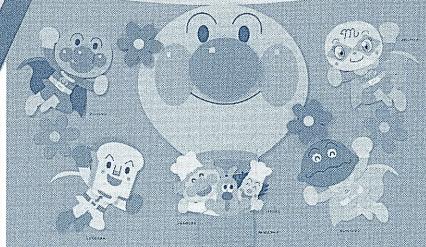
大人気シリーズ『手づくりアンパンマンが  
いっぱい! ルームデコレーション』の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン  
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを  
にぎやかにおしらせします。  
アンパンマンたちと一緒に、  
園生活を楽しく  
盛り上げて  
くださいね。

定価2,100円(税込)  
26×21cm 96頁

★ 卷末の型紙をコピーして、  
簡単に製作できます。

★ 型紙の組み合わせ次第で  
いろいろなバリエーションを  
作ることもできます。



## 【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい!

- |               |       |                |      |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント  | 島田明美  | 5. 通園グッズ       | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂  | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. めいぐるみ・おもちゃ | コッペ平沢 | 7. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 4. ランチとおやつ    | 大森いく子 | パート2           | 島田明美 |

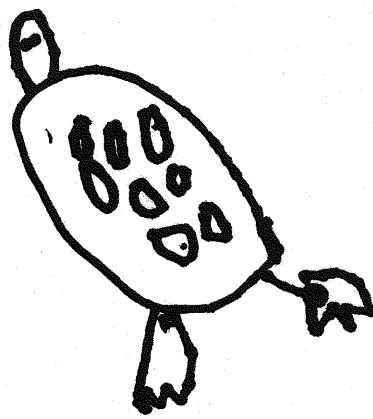
キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第105巻 第2号



# 幼児の教育

第一〇五卷 第二号

目 次

© 2006  
日本幼稚園協会

- 卷頭言 「総合施設」創設に思う ..... 神長美津子 (4)
- 幼児教育の独自性はどこにあるのか(6)
- 生命論と幼児教育の現在 ..... 矢野 智司 (8)
- 子どもたちの今を考える ..... 田中三保子 (14)
- 親が歌えば、子どもは笛吹く
- 一十七世紀オランダ絵画が語る子どものしつけ ..... 小林 賴子 (22)



秘められた物語

佐々木 晃… (32)

幼児教育と交流活動

倉持 清美… (38)

田口恒夫先生 追悼

田口先生 ありがとうございました…  
増井美代子… (46)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん (11)

庄籠 道子… (51)

私が通った幼稚園・保育園(9)

一学期だけの幼稚園…  
入江 礼子… (58)

表紙絵／さのまさこ

扉題字／津守 真

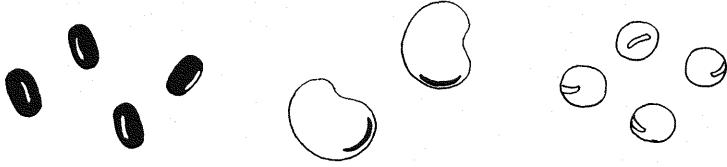
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまさこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 晴子





## 卷頭言

# 「総合施設」創設に思う

神長 美津子

今、幼児教育は、大きな転換期にさしかかっている。そのひとつに、幼稚園でも保育所でもない小学校就学前の教育・保育施設である総合施設（仮称）の創設により、現行の幼稚園と保育所の二元の保育制度が変わりつつあることがあげられる。総合施設の創設にかかわっては、平成十七年度は、指定を受けた三十六施設において、試行的にその取り組みが実施され、対象者と利用形態、施設や設備、学級編制や職員資格、教育と保育の内容、利用料と保育料等についての検討がなされている。その成果を受けて平成十八年度には、総合施設にかかる法律等が整備され、既存の幼稚園や保育所からの移管が本格的に実施されることになる。まさに、女性の社会進出の拡大や地域の未就園の子どもをもつ保護者

に対する子育て支援などの保育の多様なニーズが高まる中で、新しい時代の保育制度が生まれつつある。これまでも幼稚園と保育所の一元化に関する論議は何度も繰り返しなされてきたが、ここに至って大きく動き始めたことは、確かである。

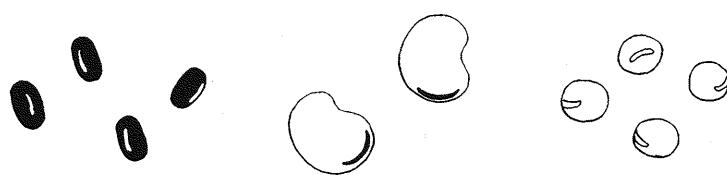
実は、昭和二十二年学校教育法の制定にあたり幼稚園の取り扱いをめぐつて、興味深い話がある。当時、幼稚園が他の学校種と肩を並べて正規の学校となることに対し、幼稚園就園率は低く（五歳児就園率七・四パーセント）、幼稚園は少数の幼児に対する贅沢な施設であるから、正規の学校とすることは適当でないとする反対意見があつたそうだ。また、幼稚園が、体系化された学校教育の枠の中に入ることにより、明治以来、日本の幼児教育が築いてきた「幼児教育の独自性」が失われてしまうのではないかという危惧もあつたそうだ。

その後に始まる新しい時代の中で、幼児期の教育・保育がいかにあるかの論議を様々に重ねた結果、幼稚園を大衆のための一般的な施設とし、すべての幼児が小学校就学前の教育を受けられるようになるためには、幼稚園を学校教育法に組み入れることが必要な措置であることの結論を得た。また正規の学校とすることは幼児教育の独自性を失うものでないことを確認し、幼稚園が学校教育の最初の段階として位置づけられたといわれている。<sup>1)</sup>まさに「学校教育のはじまりとしての幼稚園」には、戦後の貧しくきびしい時代にあって、日本の子どもたちの健やかな成長と幸せをひたすら願う関係者の熱い思いと、時代を

見据えた適切な選択があつたといえる。

さて、それから六十年が経過した現在の幼児教育・保育は、どうであろうか。ほとんどの幼児が、幼稚園または保育所に通い、小学校就学前の教育を受けている。さらに、総合施設の創設により、保護者の就労等の有無にかかわらず、幼児教育を受けることができるようになり、幼児教育の機会は一層拡大することになる。

しかし一方、時代の変化の中で、子どもや子育てを取り巻く環境は大きく変化し、新たな課題も生じている。中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のための幼児教育を考える—」（平成十七年一月二十八日）では、子どもや子育てを取り巻く環境の変化に伴い、家庭や地域社会の子育て力が低下していることが問題となり、子どもたちの失われた育ちの機会を確保することの必要が指摘されている。具体的には、幼児教育において、家庭、地域社会、幼稚園や保育所等の施設の三者の連携を推進する総合的な施策の充実を図ることや、学校教育との連携を推進し、幼児の発達や学びの連続性を確保することである。この答申では、戦後六十年の時を経て、改めて幼児教育の重要性を説き、新しい時代の幼児教育の在り方について、国民各層に向けて広く訴えている。あえて「子どもの最善の利益のために」という副タイトルをつけることに、課題の深刻さや緊急性を読み取ることができる。ある総合施設を運営する園長先生の言葉を思い出す。それは、「総合施設の課題は、ソ



フト面で幼保の一体化を図ることだが、それはなかなか容易でない。園運営では、よく幼・保がぶつかり合うが、そのどちらをとるかの議論をしていてもなかなか先に進まない。自分たちの園に通う子ども一人ひとりにやさしい方策を見つけることが解決策につながる。この意味で、毎日が「新しい時代の幼児教育の創造である」という言葉である。新しい時代に向けて改革を進める姿勢として、大事な指摘である。

確かに、時代の変化は著しい。新しい時代とは、どんな時代なのだろうか。それは、これまでの時代、これまでの社会と、どう異なるのだろうか。現時点では、こうした問い合わせに対する答えは、必ずしも明確ではない。しかし、総合施設の園長先生が指摘するよう、新しい時代の幼児教育・保育は、我々が選びとり、創りあげていかねばならない。

その際確認しておきたい、少なくとも今わかっていることは、次世代を担う子どもたちを人とつながり人間らしく育てることが教育の役割であり、その基盤づくりとして幼児教育・保育の充実が必要であるということである。これを起点とし、時代を見据えた保育制度を考えていきたいものである。

（東京成徳大学）

#### 参考文献

1) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに 一九七九年

# 幼児教育の独自性はどこにあるのか(6)

矢野 智司

## 生命論と幼児教育の現在

一年間続いたこの連載も今回で最後になります。

これまで連載のなかで、子どもが生命的な体験をするの大切さを強調してきましたが、それは子どもが生活習慣を学習することの大切さ、発達することの重要な性を否定したいからではありません。ここでは、これまでの話からもう一歩踏み込んで、幼児教育において生命論を強調する理由を考えてみたいと思います。そしてそこから、この連載の主題で

あつた幼児教育の独自性とはなにかについて明らかにしたいと思います。

教育には、さまざまな経験をして、認識能力や道徳性や社会性を高め一人前の人間になることと、遊びに代表されるように、有用なあり方を破壊することで生命に触れることとの両方が必要です。第二回の連載のときには、このことを高く人間を目指すことと深く動物になること（生命に触ること）、こ

の振幅をよりダイナミックに高く深く実現することが、教育のなすべきことだと述べました。前者については、あらためて説明の必要もないと思いますが、後者については教育関係者においても十分に理解されているわけではありません。

後者の例として、連載の第一回で遊びを取りあげたことを思い出してください。そこでは、遊びは自分と世界との境界線が溶けてしまい、子どもが全体的に世界とかかわり生命に触れる溶解体験だといいました。このような自由で喜びに満ちた体験は、誰もが遊びのなかでしておきながら、このことの大切さをいざ言葉でもって説明しようとすると、なかなか簡単なことではありません。

幼稚園の創始者フレーベルも、一人前の人間となることと、人間を超えて生命に触れる二つの方向を、恩物と遊びによって同時に実現しようとした。しかし、幼児教育においても、この後者の生命論の側面は、子どもにもそして保育者にも実感

されているにもかかわらず、言葉に言い表すことが困難なことから、現在では理論的にも実践的にも力をもつていません。フレーベルは、そのことを「生の合一」という言葉で言い表しましたが、その言葉の意味が実感できるフレーベルのサークルの人以外にはわけのわからないものでした。そのためフレーベルの教育思想は、まだ人間の科学が十分に発展していなかつた時代の過去の思想と見なされることになりました。

幼児教育で、生命論的な見方が力を失ったのは、いくつかの理由を考えることができます。一つは、幼児の教育にたいして発言してきた教育学や発達心理学といった学問が、生命論を欠いていたことです。それには理由があります。戦前戦中の国家主義的な非合理的な教育学への反省から出発した戦後の教育学や発達心理学は、科学的に実証可能な経験を重視したため、外側から觀察し評価することのできる子どものさまざまな能力や技能の発達に関心を向

することになりました。

また、社会全体の世俗化が進み、有用性を中心とした価値観がさまざまな領域に広がっていきましたから、ますます教育のなかでも有用な能力や技能の発達に、両親のみならず保育者や教育研究者の関心が当たられてきました。今日では、家庭でのしつけの弱体化が問題になっています。このことは、子どもと日々接している保育者にとって焦眉の問題です。さらに、個々の子どもにはそれぞれ個別の課題があり、その課題を見つけて発達に向けて積極的にかかわっていくことは、保育者にとって重要なことです。その課題に向けての働きかけの結果は、子どもの具体的な変化という形を取って現れます。ここで保育者は自分のかかわりの有用性と有効性を実感することができます。そのことは保育者に自分の仕事への喜びと誇りとを与えることでしょう。しかし、このような具体的な効果が目に見えにくい生命に触れる保育は、保育者にとつても自らの保育の

成果が実感しがたいものでしよう。

以上のような理由から、遊びに代表されるような生命に触れる体験もまた、役に立つかどうかの視点から、理解され評価され実践も方向づけられてきました。保育者も親も、そして教育学者も心理学者も、皆同じように口をそろえて、「遊びは発達にとって何の役に立つのか」と問います。そのように問われるとき、その問いはすでに答え方を方向づけます。そして、その答えによつて、遊びは最初から発達のための手段のようにみなされます。このような方は子どもにかかるあらゆる事柄に当たはめられています。教育関係者はいつもなににたいしでも、「それは発達にとって何の役に立つのか」と問います。



たとえば、「動物を飼うことは発達にとってどのような意味があるのか」と問います。そうして動物を飼うことも教育の手段になります。保育者も親も、子どもの責任感を養うため、感情を豊かにするため、死の体験に触れるために、といった理由で動物を飼い始めるのです。しかし、そのようななかわり方は、子どもと動物との出会いを損なう危険性をもっています。遊びもまた同じです。発達に限定された見方は、子どもの遊びを損なう可能性があります。

繰り返しますが、生活の大切さ、経験の大切さ、発達の重要性を否定しているわけではありません。倉橋惣三がフレーベルを批判し、生活をそして発達を幼児教育で重視したのには十分な理由があつたことです。またそれ以降の保育や幼児教育が、そのことをさらに深めていったことには十分な理由があります。しかし、のことから直ちに生活や発達という観点が、幼児教育の全体をとらえるようになると

き、別の問題が生じてきます。保育者が、子どもと、工場の製品のように子どもを対象としてとらえることになるでしょう。工場がそうであるようにタームスケジュールにしたがって、つまり時間割にしたがって、段階づけられた教材を子どもに提示し、有用な能力の発達を促すことになります。

目に見える現象や数量化できる結果に、保育者の関心が集まることで、目に見ることのできない出来事、また十年後にならないと現れてこないようなものの、さらには本人も気づかぬまま深く深く持続し、人生全体に通底する幸福感を作りだすようなもの、このようなものの重要性に気づかず、無視することになります。

簡単にそして短期間で成果の現れることのない生命にかかる教育も、幼児教育の重要な課題であり、そのことがまた学校教育への準備としての役割でもあります。なによりこの生命に触れる教育は、

子どもの人生全体を支える教育です。子どもに生命

と連なる幸福な根本的な存在の感覚を与えることは、幼稚教育においてもつとも大切なことの一つです。

日々の保育では、保育者の関心が個々の子どもあるいは集団としての子どもの具体的な課題に集中することは当然です。しかし、そのような個々の子どもの行為、あるいは集団としての子どもの生活を生みだしているのは、システムとしての教育です。だからこそ教育システムのなかに「生命のフレーベル」が必要となります。日々の実践を作りだしてい一番底にあるシステムの中に、子どもがいきいきとした体験を深める教育が組み込まれていることが必要なのです。教育のシステムを変えると、子どもの動きが変わりますから、子どもの具体的な課題も変わります。個々の子どもの問題行動に対応するのではなく、園内の幼稚教育全体を子どもがより深く体験するためのシステムとして捉え直す必要があ

ります。

一般に教育施設の教育的な使命は、それぞれの時代状況に生きる子どもの経験の総体のなかで変わつてきます。学校の外が十分に遊戯で満ちた空間であつたときには、学校は教育の課題として発達に専念することができます。生成としての教育は、学校の外で自然に実現できるものに任せておけばよかつたのです。ある時期まで、学校の教育課題は発達に集中することができたのだと思います。しかし、今日のように学校の外で、ゲームやテレビといったパーソナルな経験が大きな比重を占めるようになり、身体を使って集団で遊んだりする体験をもちにくくなつてゐるときは、学校のなかで直接的な身体による体験が、さらに集団で何事かをなす体験が、不可欠となります。総合学習は、そのような子どもの深い体験の不足を学校で補う意味があるといえるでしょう。

そのようなことから考えるととき、学校教育の始ま

る以前の幼児教育における今日における独自性は、深い生命とのかかわりの体験の場をシステムとしてどのように作りだすかにあるように思います。そのような生命とのかかわりの体験をもたらす教育システムを通して、生活や発達の立て直しが始まるように考えます。しかし、このシステムを動かすのは保育者であり、その一人ひとりの保育者自身が、まずこのような生命の体験に深く開かれている必要があります。保育者には、発達の確かな概念とともに、生命の生き生きしたイメージが不可欠なのです。保育者はより深い遊びへの導き手として、あるいはそのための環境を作りだす者として積極的な役割があります。

た、植物が花を咲かせ、木が大きくなる時間です。保育者の仕事は、子どもの人生のほんの短い時間にかかるだけです。しかし、この短い期間は、子どもにとつてもっとも大切な未来につながる一瞬一瞬からなる体験の時間です。だからこそこの短い間のかかわりは、なにものにも代えがたいほど貴重なのです。幼児教育の独自性とは、このような時間へのかかわりのうちにあるといえるのではないでしょう。

（京都大学）

前回『ホビットの冒険』のなかでビルボが解いたなぞなぞの答えは「時間」でした。それはすべてのものを破壊し呑み込む時間です。しかし、保育者が生きる時間はこのようすべてを呑み込む時間ではありません。チャペックが適切なイメージで描い

#### 参考文献

- 矢野智司『自己変容という物語—生成・贈与・教育』金子書房、一〇〇〇年  
矢野智司『動物絵本をめぐる冒険—動物・人間学のレッスン』勁草書房、一〇〇一年

# 子どもたちの今を考える

田中 三保子

先日の新聞に、「公立小の校内暴力、先生相手急増」という記事が載っていました。「子ども同士や器物破損の校内暴力は十パーセント台の増加だったのに対し、教師に対する暴力は三三六件の過去最多で、十三パーセント増となつた。中高生の校内暴力は減少し沈静化の傾向がみえるのに、小学生の校内暴力には歯止めがかかっていない（二〇〇五・九・二三 朝日

新聞朝刊）」とありました。私はこういった記事を読むと、教育現場の先生方の大変さを思うと同時に、校内暴力を起こした（ている）とされる子どもたちは、どんな幼児時代を過ごしたのだろうかと思つてしまひます。その子一人ひとりにとっての幼児期がどんなものだったのだろうかと思うのです。解説には「教育委員会からの報告では、ささいなことで突然的に暴力に

訴えるケースが目立つという。とくに、矛先が教師に向かう例が急増したことが特徴だ。最近頻発した重大な少年事件では、たいてい何らかの前兆行動が見つかっている。小学生に何かが起きてはいないか、みきわめる必要がある」とあり、小学校での実効性のある対策の必要性に言及しています。こういう状況では、抜本的な対策を探ることが、今、小学校には求められているのでしよう。でも、私は思います。小学生になる前の、「幼児期」にこそ大人はもつと目を向けてほしい、一人ひとりが充実した幼児期を送ることができていれば、こういった事態はそうそう起ころないのでないかと。

私は、問題視される子どもたちの行動が、彼らの心の叫びのように思えるのです。それは、社会的には許されるべくもない行動とわかついても押さえぎれなくなってしまった子どもの、あるいは、その判断力も育てられないままにここまでてしまつた子どもたちの、「社会」に対する抗議であり、訴えであり、表現できない思いのあらわれだと思うのです。その叫びは、乳幼児期のどこかで元が生まれ、適切に表現されることもなくしまわれ、ためこまれ、その後も外にあらわれる機会もないままに（もしかしたらさらに強化されて）幼児期を通り過ぎて、あるとき、一気に噴出してしまつたのだと思えるのです。

働く（働きたい）母親が増え、「保育に欠ける（ことなる）乳幼児」が保育施設の受け入れ人数を超えて、いわゆる「待機児」の数が問題になっています。仕事の間に子どもをみてくれる人や場所がなければ、母親が仕事を出ることは難しいからです。税金や年金

幼児は自分の思いを自分で把握し、他者がわかるよう表現することがまだうまくありません。さまざまな手段を使つてあらわしたり、あらわそうとしたりはしていますが、微妙だつたり、わかりにくかつたりして、大人にうまく伝わるとは限りません。そして何よりも、まだ大人の支えを必要としていますから、大人に嫌われたくないのです。自分の思いをわかつてもらえなくとも、大人の意向を汲み、意向に添い、結果として我慢をしてしまうことが多いのです。大人は子どもの不本意ながんばりを理解せずに、聞き分けのよい「いい子」とみなしているのではないでしようか。

先日、薬局へ行つたときのことです。二組の親子が調剤を待つていました。一人の子どもの一人、三歳くらいの男の子がテレビ（床から一メートルくらいのところに置かれている）の前に立ち、「英語であそぼ」の画面に見入っていました。そのうち、放送に合わせ

て「on」「off」と声を出し始めました。二人の母親のうちの一人が私の方をちらつと見やり、その子に声をかけそうになりました（私はこのときに、この人がこの子のお母さんなのねとわかりました）。あつ、制止されそうと感じて、私はその子のうしろから「じょうずねえ」と声をかけました。母親はことばを飲み込み、再び視線を子どもからそらしました。その子は背後の大人の状況とは無縁に、テレビに応答しています。声はだんだん大きくなり、画面の中でみんなが踊り出すと、合わせるように身体を盛んに動かし、まねして大声を出しています。一歳くらいの女の子がテレビの脇に立ち、男の子をじっと見つめています。視線はひたすら男の子の顔に注がれています。そこへ、初めに年配の女性、つづいてやはり年配の男性が入ってきました。ちょっと間があつて、母親は男の子の方を向き、名前を呼んで手招きました。男の子は振り向いて、それから母親の隣に腰掛けました。「英語であ

そば」は終わりましたが、まだ子ども番組は続いています。私はそこで薬局を後にしたのでその後の経過はわかりませんが、男の子のようすと母親のふるまいが印象に残りました。

私からは表情が見えませんでしたが、男の子は多分、テレビの中の人々の動きに吸い込まれるようにして、声を出し身体を動かしていたのだと思います。どんどん夢中になつて、声も動きも大きくなつていきました。もちろん、周りは目に入つていないうです。三歳くらいの子どもにとつてはごく自然なるまいですし、好奇心に引っ張られて全身が自然に動いていくようですが、私にはほほえましいとさえ思える光景でした。傍の女の子が引き込まれて、食い入るように彼の顔を見つめていた姿からも、彼の行動がごく自然なものであつたことがうかがえます。私は、まばたきもせず男の子に見入つているその女の子の表情に、思わず見入つてしまつたほどですから。でも、母親は彼を呼

び寄せ、彼は母親の顔を見てからテレビの前を離れ、もぞもぞしながらもおとなしく座つていました。

後から薬局に来た人が、明らかに迷惑そうな顔をしたわけはありません。でも、誰も何も発しない中、ひとり、男の子だけはそれでいる感じで、子どものふるまいをにこにこ見守る雰囲気は全くありませんでした（女の子の母親も黙つて違う方向を見ていました）。

母親が男の子を呼んだのは、そんな雰囲気の中で、子どもの行動が周りに迷惑になることを恐れたからでしょう。自分の場所から動かずに、名前を呼んで身振りで示すといったやり方で子どもに指示を与えるました。そして、男の子は、あんなに夢中になつていたのに、母親の思いを感じとり受け入れ、すぐ自分行動を切り替えたのでした。

私は、男の子の母親の、周囲への過敏とも思える反応と、男の子の母親への、



これまた過敏な反応が気になつたのだと思います。小さな薬局でしたから、男の子の声は否応なしに響きます。でも、英語の単語をときどき発しながら身体を左右に大きめに揺らしているだけで、うろちょろしていわるわけではありませんでした。男の子にはまだ調剤を待つことの意味はよくわからないでしようし、訳のわからない時間を待ち続けるための大人の働きかけもありませんでしたから、目の前のおもしろそうなことに引き込まれるのは自然なことでしよう。薬局側でも、子どもがそれなりに待てるようにと子ども番組をつけているのだと思います。ただおとなしく待つことを強いるられて、テレビと一緒に動き出すことさえ許されないなんて、子どもにとってなんと悲しいことかと思います。でも、母親がそれほどまでに周囲に過敏になるのには、今までにそうせざるを得ない体験を重ねてきたということもあるのでしょう。母親たちは、子どもがその場にふさわしいふるまいができないのは、きちんと

んとしつけをしないからという周囲の視線にさらされています。結果として、子どもの視点に立つよりは、周りの視点から子どもを見て、子どもをおとなしくさせる方向づけをしてきたのだと思います。男の子の切り替えの早さは、そういうことの積み重ねの結果とはいえないでしょうか。

私の経験では、子どもは夢中になるとどんどんのめりこんで、自分で納得しないと簡単には切り替えられないものでした。その子なりのやり方で抵抗や不服従の意思表示をします。子どもに納得してもらうべく、私はあれこれ試みます。子どもは、話の内容でわかってくれることもありましたし、真剣にわかつてもらおうとする私の気持ちに応じてくれる（と思われる）こともありました。聞き入れてもらえないことも、もちろんありました。あの男の子は、抵抗でも不服従でもなく、母親の説得の結果でもなく、あつ、だめなんだといった感じで、すぐに母親に従いました。いつもの

こと、といったようすにも見えました。子どもの側が、母親の望むことを即座に読みとり、望まれている行動へとすぐに転換したのです。あんなにもあつさりと。ただ待ち続けることは大人にとつても結構つらいものですから、子どもであればなおさらでしょう。でも、大人が支えてくれれば待てるものです。大人が、絵本を読みながら、手遊びをしながら、子どもが退屈しないように、しかも「待つ」気持ちを少しでもてるよう、一緒に時を過ごす工夫をしていく。そういうことの積み重ねがあればこそ、子どもは待つことができるようになっていくのではないでしようか。そして、待つことを支えてくれる大人を心から信頼するのです。ひとり待たせて、動き出すと呼びつけて静かにさせることを繰り返せば、子どもはおとなしく座つているようになるかもしれません。でも、場や状況を自分で判断し、ふざわしい行動をとれるようになつていでしちょうか。母親や大人の目があるからこの場は自

分を制止しているだけにならないでしょうか。

話は変わりますが、授業の中で、学生に三歳児の保育ビデオを見てももらいました。ひとりの男の子が、毎日一緒に遊んでいた友だちが引っ越して来なくなつた日、促されてもおべんとうを片づけようとしないでいるようすが映っています。「おべんとうを片づけない」とことに関して、あなたなら男の子にどうかかわるかと学生にたずねました。「手伝ってあげる」から、「片づけるまでは遊ばせない」というものまで、働きかけ方はさまざまでしたが、ほとんどの人がとにかく自分で片づけるように働きかけると答えました。理由は、自分のことは自分でべきであり、やってあげることは子どもを甘やかして勝手気ままを許すことになり、集団のルールが守られなくなつてしまふ、幼いなりにルールを守ることは大事だから、ひとりだけ特別



扱いをするわけにはいかない、といったものでした。

ルールだから守らせなくちゃと考えれば、例外なく子どもに自分で片づけさせようとしむることになるでしょう。男の子にとって今日は特別な事情のある日だから、どうしようかと考えた人たちもいましたが、ここで許すとこれから先ずっとやらなくなってしまうのではとの危惧を振り切れず、やつぱり自分でやらせなくちやとの結論になつたようでした。事情があつても、集団から見れば和を乱す身勝手な行動と受けとられてしまうのでしょうか。でも、私は思います。集団よりも、今を生きているその子をまず尊重すべきではないのかと。集団が個を規制する社会では、個は息を潜めて生きていくしかありません。個が生き生きすること、生き生きした個の集まりが集団を作っていくこと、子どもにとつての個と集団との関係は、そこを基盤にして体験的にわかっていくものなのではないでしょうか。そして、そこに自分を理解し受け入れ、自

分を信じてくれる大人がいればこそ、集団と個が対峙するようなときにも、集団のために自分を律することができるようになるのです。一回許すとこれから先もずっとやらなくなるなんてことはないと、私は信じます。

子ども（特に幼児）も、社会の一員である以上、どんな事情があるにせよルールは守るべき、小さいうちはまだよくわからないのだから、大人がきちんと教えてしつけるべきという考え方方に、今、子どもたちは包囲されているような気がします。母親さんもがそう考へていてるようです。でも、幼児であつても、自分でさまざまなことを学びとつていくことができるし、事実多くを学んでいます。大人はそこを注意深く見取らずに、社会の枠を一方的に子どもに押しつけていないでしょうか。幼児が納得するには、ことばでの説得ではなくて、それに見合う体験が不可欠です。幼児は、あ

れこれ自分で試してみなければ、自分というものも、他者も、社会もわからないのです。しかも、ほんとうにわかつていくためには、そこに、幼児の試行錯誤を見守り、他者や社会と幼児を仲介する大人の存在が必要なのです。外なる世界を自分の視点からしか捉えられない幼児に、信頼できる大人が他者の思いを適時に伝えるからこそ、幼児は集団のルールがわかり、受けいれようとしていくのです。また、いろいろやつてみて、うまくいくともいかなくとも、共感し認めてくれる大人の存在があるからこそ、幼児は人を本当に信頼できるようになるのであり、自分に自信がもてるようになって、自分の世界を外に向かって広げていかれるようになるのです。大人が信頼できなければ、幼児は本来の自分を表現しなくなるでしょう。

その子らしさを發揮するより、集団に順応することがよしとされる環境では、子どもははみ出さずに生きていくでしょう。子どもはその環境に合わせて生きて

いくしかありませんから、意識せずに大人に合わせてしまうのでしょうか。なんとも切ない思いです。子どもが自己発揮しにくくなってきた今、せめて幼児教育の場は、子どもたちがひとまとまりにくくられないで、それぞれが自分の力であれこれ試し学んでいくことができる場所であつてほしいと願います。たくさんの幼児が、枠に縛られずに自分を思いきり表現し、内なる力を発揮する喜びを味わう体験を、「幼児期」に積み重ねることができるよう切望します。

「ひとり」がその子らしく生きることが大切にされ、そういうひとりが集まつて「みんな」ができる、みんなとのかかわりの中から「みんなのために」が生まれ、ひとりがみんなをも大事にしていく社会がずっと続していくよう心から望みます。

(元幼稚園教諭)

# 親が歌えば、子どもは笛吹く

## —十七世紀オランダ絵画が語る子どものしつけ—

小林 賴子

オランダに、ヤン・ステーン風の家事の切り盛り、

という言いまわしがある。<sup>①</sup>お片付けやしつけなんか何のその、大人は飲んで笑つてドンちゃん騒ぎ、子どもは心ゆくまでいたずら三昧。こんなふうでいいのかしら、と思わず心配になつてしまふほどちらかつた部屋の中。ヤン・ステーン（一六二六—一六七九）は、そんな家庭の情景を繰り返し描いて、避けるべきインモ

ラルのお手本となつた十七世紀オランダ画家である。

ハーゲのマウリツツハイス美術館が所蔵する《親が歌えば、子どもは笛吹く》（図1）は、山ほど伝わるその種の「ヤン・ステーン風の家事の切り盛り」図のなかでも、きわめつきの一品といつていいだろう。までは、小ぶりの風俗画が多いなかにあって、一三四×一六三センチメートルという堂々たる大きさを誇つて

いるから。その上、作品の質が圧倒的に高いから。そして、何よりも、そこに当時の家庭内での教育觀が如実に反映しているからである。

十七世紀當時、オランダでは教育をめぐり熱い議論が交わされていた。親から譲り受けた本性は決して変わらないとする陣営と、教育を通じて人間形成は可能なはずだと信じる陣営。前者は、親の本性の罪深さ、愚かさはそのまま子どもに伝わっていく、だから、子どもは強制的に、頭ごなしにしつけるしかないのだと主張する。後者は、子どもの心は何も書かれていない白い紙のようなもの、だから、教育によつていかんとも書き込む（育て上げる）ことができはずだと考える。<sup>2)</sup>「親が歌え、子どもは笛吹く」は、その二つの議論のちょうどまんなかへんにある諺で、ステーンはその微妙な、どつちつかずのなりゆきを絵画化しているのである。親の歌は子の笛の演奏の見本となるが、その際、親の悪い筋が伝わらないよう厳しいしつけで

矯正を試みるべきなのか、それとも、教育の効果の大いなる可能性に賭けるべきなのか。ステーンの絵は、ユーモアを込めつつ、一筋縄ではいかぬその問い合わせを見る者に投げかけているようと思える。

まずは、作品をじっくり見てみることにしよう。部屋の一隅の、タペストリーの掛かったテーブルに、ブドウとレモンと牡蠣を盛った皿が置かれている。その周りを中流ぐらいの三世代の大人と子どもが囲う。キヤップをかぶり、窓に背を向けて座り、この情景を満足げに見つめる人のよそそうな老人はおじいちゃん。その斜め向かい側には、頭巾をかぶり、鼻眼鏡を掛け、右手に紙を持ち、左手でその一部をなぞるおばあちゃん。紙には作品タイトルとほぼ同じ内容の「歌／歌つたとおりに笛を吹く。昔からそうだつた。一年たつても百年たつても、私が歌い、みながついてくる」というテキストが書かれている。二人の老人の間

に正面向きで座り、赤子を胸に抱き、おばあちゃんの持つ紙を覗き込む若い女はお母さん。彼女はおばあちゃんと声をあわせ、一緒に歌おうとしているようだ。老女の向こうの、山高帽をかむつた上機嫌の中年男はお父さん。右を向き、向かいの幼い息子に、なんと、戯れにパイプを吹かせている。右端後ろにはやや年長の少年が立ち、バグパイプを吹く。「笛を吹く」と「パイプをふかす」、「バグパイプを吹く」はオランダ語では同一の言葉pijpenになるから、まさしくおばあちゃんの紙に書いてあるとおり、子どもたちは歌にあわせて「パイプ」の三重奏をしていることになる。二人の「パイプ」を吹く少年の間には、やや幼い子どもが顔をのぞかせる。この子もやがておばあちゃんの歌にあわせて「パイプ」をふかし始めるのだろうか。いかにも楽しそうな三世代家族の団欒の情景なのだが、なにやら放縱な雰囲気も漂っている。画面左手前を陣取っている若い女のせいだ。差し出した左手にワ

イン・グラスを持ち、だらしなく座る彼女の頬は赤い。どうやらしたたか酒をきこしめし、すでにご機嫌の様子だ。お父さんの後ろには、肩にナップキンを掛けた若い男が立ち、右手を高くかざし、これみよがしにワイン差しから女のグラスへと赤い液体を流しいれる。同じ緑の服をつけ、無理な姿勢ながらも腕を伸ばしあうこの若い二人は、先に挙げた三世代の人々とは明らかに異質である。画面の左右に分かれた構図上の位置を考えれば、家族の一員というよりは、三世代の人物たちのまとめ役、この情景への注解役として描きいれられたと考えられる。場面の周縁部分に配されたモティーフ——左手前の床の上に甕、窓辺の液体の入った瓶とグラス、止まり木に休らう赤いオウム、壁に掛けられた籠とそのなかの二羽の鳥、そして前景や右寄りに立つ犬——も、おそらくは同じように注解の役割を担わされているようと思える。

では、その注解とはどのようなものか。ステーンは



1 ヤン・ステーン《親が歌えば、子どもは笛吹く》、1663—65頃、ハーグ、マウリツツハイス美術館



2 クリスペイン・デ・パス  
《節制》、1600、銅版画



3 ヤン・ステーン《十二夜》、1668、カッセル、国立美術館

この賑やかな情景を通じて、一体、上に簡単に触れた二つの教育論議のどちらの肩をもとうとしているのか。

当時、オランダで最も大きな影響力を及ぼしていたモラリストの一人にヤーコプ・カツツなる人物がある。多くの著作を物したが、ここでは『古今鑑』という著書に注目しよう。そこで、諺「親が歌えば、子どもは笛吹く」に触れ、次いで「猫は生まれつきネズミ捕り」、「親ヤギが牧場でじゃれあれば、子ヤギもまねする」、「青い鳩の子は青」といった言いまわしに言及しているからである。それぞれの動物には、それぞれの動物に固有の性質が親から子へとうけ継がれていく、それは自然の理であり、おいそれと変わるものではない、人とて同じこと、という含みがその記述からは垣間見える。カツツが、人の振る舞いは本性により決定されていると考える陣営にくみしているのは明らかである。<sup>3)</sup>

そんなことを考えてステーンの作品を見直してみると、動物の姿がずいぶんと目立つことに気づく。オウム、二羽の鳥、そして犬。誰に強制されるでもなく、オウム、二羽の鳥、犬は、それぞれ人の言葉を繰り返し、籠のなかで同じ声で鳴き合い、人に従順につき従う。まさにカツツが引き合いに出している言い回しそのものではないか。人とて例外でないとすれば、パイプを少年に吹かせるお父さんの呆れた振る舞いは、やがて、そのまま息子のなぞるところとなる。かくして三世代の人々は、ワイン・グラスを掲げる左手前の女性の思うがままに、いやとうなく愚行に走り出す。胸元のひもを緩めた彼女が脚を載せる行火は、風俗画にしばしば登場する性的な欲望の徵にほかならない。<sup>4)</sup> 彼女は生まれもつた愚かさ・欲望・放縱を制御することなく体現する者として、三世代の家族の情景に君臨し、彼らを本性のおもむくままに振る舞わせるのである。

だが、一方で、かの酔った女にワインを注ぐ男は見る者に別のことと訴えているように見える。器から器へ液体を注ぐのは、よく知られた節制のしぐさだからである（図2<sup>3)</sup>）。本来は、水でワインを薄める、という動作になるところだが、ここでは、伝統的なイメージからちよつとはみ出して、ワインをグラスに注ぎ、左手前の床の上の水差しで水をほのめかすことにしてしまう。画家は、画像の伝統の力に想像力を左右されはするが、一方で、いつだつて表現の自由をもつてているのだ。机上の皮を剥かれたレモンも、おそらく、偶然そこにあるわけではなく、節制の意味合いをもう一度、ダメ押ししているのである。レモンは、ワインに入れ、アルコールの強さをやわらげる果物として用いられていたからだ。節制という美德をほのめかすレモン。静物画でレモンとワインの組み合わせを見たら、要注意である。

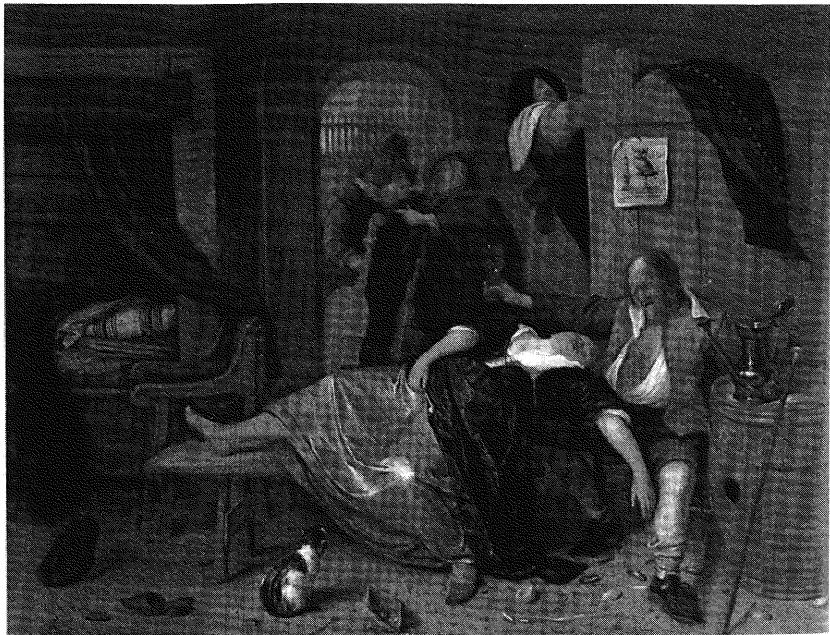
ちなみに、したたかに酔つて羽目を外す女は、ス

テーン作品におなじみのモティーフの一つだが、彼女が節制のモティーフを伴つて登場するのはごくまれである。だから、たいていの場面は放縱の思うままとなり、無秩序の巣となつている。たとえば一月六日の、救世主ご公現を祝う『十二夜』（図3）。画面中央に身を伸べて座り、ワインの入った壺をみずから右手に持ち、手酌でワインを存分に味わう女は、新年のお祝いもかねた十二夜をお祭り騒ぎに変えてしまつてゐる。しかも彼女の連れは、このたびは、ガラガラ太鼓を鳴らす「愚者」である。お祝いの席はいやでも乱れざるを得ない。彼女の後ろで机の上に立つ子どもも、だから、ワインを飲んでしまうことになる。よく見れば、彼にワインを飲ませてゐるのは、なんと、修道女である。実は、紙の王冠をかむつたこの少年は、十二夜の主人公に選ばれた「王様」なのだが、親たちは彼の行状にまつたく注意を払つていない。ほうつておかれた子どもは、まんまと放縫の女の罠にはまつてしまつて

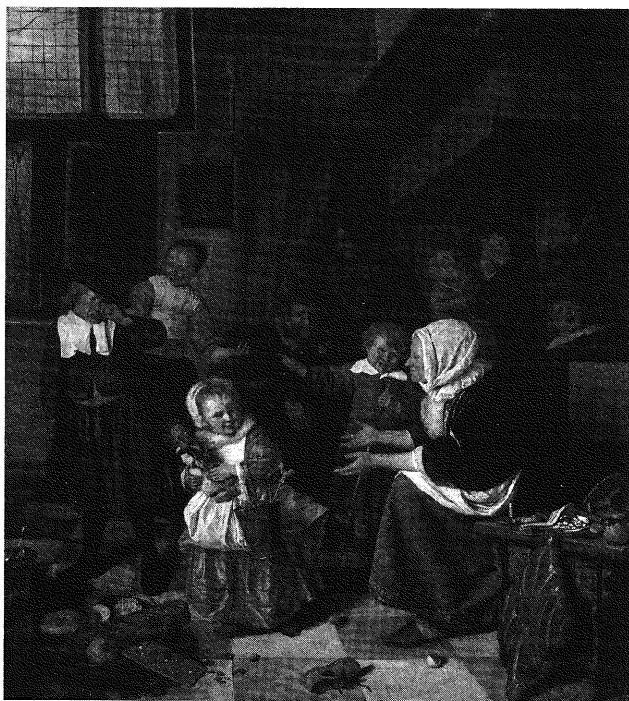
いる。

『親が歌えば、子どもは笛吹く』(図1)に戻ろう。ワインを注ぐ若い男の動作、机上のレモンは、画面の中央にあって、すべてのモティーフを統合する位置にある。放縫は、節制の力に抑制され、場面を支配するには至らない。つまり、節制というよき手本になれば、善なる振る舞いへと目が開かれ、周囲に配された人々も放縫を寄せつけなくなるのである。よく見れば、画面中央に陣取る若いおかあさんは、放縫な女とはいからにも対照的に、子どもをやさしく胸に抱き、よき母の手本となつてほほえんでいるではないか。そうなれば、オウムや犬も、必ずしもただのオウムがえし、本性へのひたすらなる隸属を示す消極的な負のモティーフではなくなる。むしろ、提示されたよき例を模倣し、学習していく能力の高さを示唆するものと解せることになる。絵画では一つのモティーフが多義的に作用するのは決して珍しいことではない。ときには、この情景のように、正反対の意味を担つて登場することすらある。だとすれば、「親が歌えば、子どもは笛吹く」という諺は、この作品において、教育の無力をほのめかすとともに、親の正しい教えにより、子を望ましい方向へ導くことができるという、肯定的な内容をもあわせもつことになろう。

おそらくステーンは、相矛盾する当時の教育論議の双方を『親が歌えば、子どもは笛吹く』(図1)という一つの作品のなかに同居させようとしたのだ。悪ふざけの過ぎた情景を面白おかしく描き出し、しようと諦めの笑いを誘い、一方で、どこか思い当たる節のある振る舞いから教訓を学びとらせ、よき方向へと目覚めさせる。楽しみと教訓。それは十七世紀オランダ絵画が担つていた重要な役割の一つにほかならぬ<sup>16)</sup>。『親が歌えば、子どもは笛吹く』を含め、ヤン・ステーン風の家事の切り盛りには、両義的なメッセージー



4 ヤン・ステーン《見ようとしなければ、蠟燭も眼鏡も役立たず》、1668—72、アムステルダム、国立美術館



5 ヤン・ステーン  
《シンタ・クラース》、1665—  
1668頃、アムス  
テルダム、国立  
美術館

ジが込められていることが多い。にぎやかに刹那の樂しみにふける人々の傍らには、賢明のシンボルである

フクロウの絵や（図4）、死のシンボルである髑髏がそつと置かれていたりする。見る者はそんな光景を楽しみながら、目を見開いて、みずから日常の暮らしやその行く末を顧みる。子どものしつけと例外ではなかつたであろう。

「親が歌えば、子どもは笛吹く」のほかにも、ステーンには、家庭でのしつけの様子を描いた作品がある。オランダの子どもがいまもつてクリスマスより心待ちにするシンタ・クーラース（聖ニコラウス）のお祝いを主題にした作品群は、なかでも、私の好みの一品である。そのお祝いの日（十二月六日）に、子どもたちは暖炉の傍らに靴を置き、シンタ・クーラースからの贈り物が、翌朝、靴の中に見つかるだろうことを期待して眠りにつく。良い子には望みどおりの贈り物が届

くが、いけない子には軽いムチのお仕置きが待つている。

図5でも、両手を差し出す前景の母親の前には、首尾よくシンタ・クーラースからお人形とバケツいつぱいのキャンドイーを手に入れた上機嫌の少女がいる。母親の傍らでは、コルフ（ゴルフの前身の遊戯）のステッグをもらった少年が満面の笑みをたたえている。ところが、彼の右手の先では、年上の兄がベソをかいている。どうやら、背後の少女が左手に持つこの兄の靴には、贈り物ではなくムチ（見えにくいか、靴に差し込まれた小枝）が入っていたようだ。小さすぎる洋服に入りきらない彼の体。身体と精神の成長のアンバランスが示唆されていて、なかなかに面白い細部である。この一年、いたずらが過ぎた彼は、お尻たたきの、軽いお仕置きを受けたばかりなのだろう。でも、その彼にも、どうやらサプライズがあるらしい。画面後方のベッドのところにおばあちゃんがいて、右

手で彼に合図を送つてゐるからだ。此にて、泣かせ

て、反省させし、やめ、最後には、お前にもアレンゼントがあるよ、と口の悪い機嫌を直させる。飴とマチを使つてのしつけをせんじ地でらく情景である。

親が歌えば、子どもは笛吹く。わが身を振り返つても、生まれもつた本性はそつたやすく変わるものではない。しかし、それでも、親の振る舞ことしつけや教育は子どもに何らかの影響を及ぼすりだらう。それが吉と出るか、凶と出るか。《親が歌えば、子どもは笛吹く》(図一) でもやうだが、子どもに悪ふざけする大人の顔にステーンはしばしば自分の顔を重ね合わせている。その自虐的なユーモアの背後に、反面教師になりかねぬ親のありようが垣間見える。諺の含蓄はまいとに深い。しかし、ステーンの絵画世界はやむに深い洞察に満ちてゐるようと思える。

(田口大学)

註

①Jan Steen. Painter and Storyteller (exh.cat.ed. by H. Perry Chapman et al.), National Gallery of Art, Washington, 1996-97, p.234

②Mirror of Everyday Life. Genreprints in the Netherlands 1550-1700 (exh.cat.ed. by E. de Jongh et al.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1997, p.254

③Jacob Cats, Spiegel van den ouden ende nieuwe tijd, no. 56を参照されたる。ハルメールの『牛乳を注ぐ女』の画面右下の行火を同じ意味に解する研究者々。

④Roemer Visscher, Sinnenpoppen, Amsterdam, 1614

○

no. 56を参照されたる。ハルメールの『牛乳を注ぐ女』の画面右下の行火を同じ意味に解する研究者々。  
⑤Portretten van echt en trouw (exh.cat.ed. by E. de Jongh), Frans Hals Museum, Haarlem, 1987, p.292

⑥Tot Lering en Vermaak (exh.cat.ed. by E. de Jongh), Rijksmuseum, Amsterdam, 1976 (日本・英・仏・西・荷・オランダ絵画のイコノロジー) 小林頼子監訳・ZHK出版、11  
〇〇五年 八二一一〇四頁) を参照されたる。

# 秘められた物語

佐々木 晃

子どもたちが背負い、園にもち込んでくる様々な問題に向き合うにつけて、子どもたちをめぐる諸事情は、一層厳しくなつた感じがします。また、近年は特に、親御さんの子育ての悩みや、ご自身の人格形成の課題にも、一緒に向かい合う機会も増えてきました。私自身も同世代の悩み多き

親なので、それはとてもよくわかります。しかしながら、一緒に育ち合つていける連帯感と安心感が、私の保育を支えてくれています。

ところで、このような背景をもつ子どもたちだからこそ、あるいは、そのような子どもを送り出す親だから、なおのこと、遊びのもつ力の偉大さ



▲さあ、大工仕事の始まり

を痛感するこの頃です。この子どもの姿は遊びに没入する、遊び浸るという表現の方が適当なのかかもしれません。

### 「森のレストラン」

中庭が影で暗くなるほど大きくなつたカイヅカイズキは、保育者の間で考えに考えた挙げ句、防犯と採光という理由で先端を切り落としました。

上から光が差し込むようになった、その木の中を、子どもたちは見逃しませんでした。ままごとやホテルごっこを続ける子どもたちの「上履きのまま往き来したい」という願いが叶うように、年長組たちと保育者、武田のおじさんたちとで大工仕事を始めました。

テラスからつづくように、すのこ板の渡り廊下をつくつたり、「トトロ」が入つてくるような窓を

つくりたい」というモカの発想で、カイヴカイブキの枝打ちをしたりしました。木の中は板張りにしました。

作業はまる三週間つづきました。「一方通行では火事の時逃げられない」「お客様がいっぱい来たらどうする」など、作業の過程でいろいろな暮らし方のイメージや構造の課題、工程の修正などが真剣に話し合われました。

まだ、床が張れたばかりの状態のとき、リコが「ねえ、今日のお弁当はここで食べよう」と提案しました。みんな喜んで賛成しました。中に入れないと子どもたちは、周りにござを敷いて、それを眺めながら弁当を食べました。

「ねえねえ、なんていう名前がいい?」この家」とリコが言うと、ユウキが「トトロの家はどう」と言います。すると、すぐにヒロキが「なん



▲真剣に話し合いながら進む作業



▲「森のレストラン」

だかお化け屋敷みたい」と言います。「森の家はどう」とモカが提案しましたが、「なんだかわたしのおうちみたい」とモリユウカが言って、皆肩を落としました。「だったら、やっぱり、森のレストランか」と、トモヤが言うと、皆「そうそう、お弁当食べているし」と、話が落着しました。

傍らで会話を聞いていた保育者が「森というイメージは、皆もつているんだなあ。そこは同じなんだなあ」と感心して言うと、リコが「先生、すう一つ、息吸つてみてよ。ねつ、森の匂いがするだろ」と目を閉じて深呼吸しました。周りの友達も同じように目を閉じて息を吸いました。「する、する。ああ気持ちいい」「食欲出るなあ」ヒロキとトモヤはおどけて、弁当をかき込んでいます。

「森のレストラン」ができあがると、年中児たちも、こっそり訪れるようになりました。草や木の実を持ち込んで、葉っぱの皿に盛つたり、石でつぶしてご馳走にしたりしています。ある時は、リスやネズミの家族になつたりして過ごしています。

ある日、年長児のモカとリコがカイヅカイブキの葉を石でつぶして粉状にしていました。聞くと、「お抹茶にするの。新田先生がしてくれるでしょう」と言います。一人は、この粉を茶碗にいれて、泡立て器でしゃかしゃか混ぜ、「うーん。いい香り」と嗅ぎ合っています。「先生も一服どうぞ」と保育者にも振る舞われた抹茶は、森のレストランのメニューに加わりました。

### 可能性を拓いていくような輝き

子どもたちはいろいろな人物や動物になつて遊



▲年中児もこっそりやってきて……

ぶ中で、様々に自分を表現しています。表現しながら、自分の新たな側面に気付いたり、友達に教えられたりしていっています。ものをつくり、表現しながら、その実は自分自身をかたちづくっているかのようです。日常の生活や人間関係の中では表現しにくいようなのですら、遊びの中の役割や登場人物になると容易に表現できていることに驚かされます。子どものその表情には、自らの人格形成の可能性を拓いていくかのような輝きがあります。

### 遊びの生まれる出会い

人やもの、事象や文化など、様々な出会いを経て「森のレストラン」の遊びは生まれていることがわかります。最近、私がおぼろげながら感じ始めたことは、それぞれのもつ「生の物語」が豊か

であるほど、その出会いが意味深いということです。

数十年前、私どもの園で、子どもと共に暮らした先輩の手で植え育てられてきた樹（カイヅカイズキ）。それを受け継ぎ、自分たちなりに守り育てようと努める人との園生活。それらの物語が今回のような遊びの現象を生み出したと言つても過言ではないでしょう。子どもたちが遊び浸る環境には、豊かな物語が秘められています。出会いによつて、それが紐解かれ、かかわりの中で共に楽しみを分かち合つていきます。その楽しみは子らを癒し育んでいくのでしょう。子どもたちの喜びの姿を介して、過去と、保育の今が結ばれるとき、私ども保育者にあたたかな力がみなぎつてきます。

（鳴門教育大学附属幼稚園）

# 幼児教育と交流活動

倉持 清美

る交流活動に焦点を当てたい。

幼児教育は、家庭・地域社会・幼稚園や保育園などの施設の、大きく分けて三つが担っている。しかし、家庭・地域社会の教育力が落ちたといわれている昨今、幼稚園や保育園などの施設が幼児教育に果たす役割は大きくなっている。本稿では、主に幼稚園などの施設で行われている幼児教育について取り上げることにする。そして、現在盛んに行われている

幼稚園などの施設では、現在様々な交流活動が盛んに行われている。小・中・高・大の異年齢の生徒たち、高齢者、外国人など、異世代、異国籍と多岐にわたっている。少子化、核家族化などの社会状況とも絡み、幼児を取り囲む社会の中の様々な人たちとの交流活動の意義は高まっている。本稿では、様々

な学校種との間で実施している交流活動に焦点をあてて、現在の幼児教育について考えていただきたい。

一、中・高校生との交流活動

少子化の影響を受け、幼い子とかかわることなく親になる夫婦が増えてきている。虐待件数の増加とともに、親になる世代の養護性をいかに育むのかは大きな課題となっている。大学生に行つた研究によると、子どもとふれあう経験のある学生は、そうでない学生より子どもに対する肯定的感情が高く、子どもとふれあうことのない女子学生より、ふれあう経験の多い男子学生の方が肯定的感情が高いことがわかつている（花沢・松浦一九八六）。こうした研究から、親になる前に乳幼児とふれあう体験の場を確保しようとする動きが盛んになつてきている。中・高校の家庭科では、保育体験学習を中心として保育学習を進めているところも多くなつてきていて、

る。家庭科の授業として保育園や幼稚園に行く場合、全クラスの生徒たちを連れていくことになる。従つて、子どもに對して肯定的な感情をもつていないう生徒も、乳幼児とふれあう体験をする。こうした体験が、中・高生にとつて短期的な効果を示すことなどが様々な研究で実証されている。概して、子どもに對する感情がプラス方向に変容する生徒が多い。中・高校の教員たちも、体験學習後の生徒達の表情が生き生きとし、その後の授業が落ち着いた雰囲気になるという印象をもつてゐる。

また、行政の立場からも、中・高生と乳幼児とのふれあいの場を推進しようとする動きがある。子育て支援を促進するためには次世代育成支援対策推進法が平成十五年に制定され、各地方行政は行動計画を策定して平成十七年四月から実施している。この行動計画の中に、多くの行政が中・高生の乳幼児とのふれあいを促進することを施策としてあげている。

やがて親になる世代の育成を主眼としているのだ。

その他にも、職場体験、ボランティア学習など、様々な目的で、幼稚園などの幼児教育施設が中・高校の交流活動の場となつてゐる。幼児教育の側も、中・高生などとの交流に積極的な意義を見出そうとしている。中央教育審議会では、今後の幼児教育の取り組みと方向性を踏まえ、幼児教育の機能強化のための具体的方策をいくつか掲げたが、その中の課題の一つに「幼児教育を支える基盤などの強化」がある。具体的施策として「中・高生、大学生など親となる世代の活用」があげられている。

中・高生が様々な交流活動の一環として保育園や幼稚園に来ることは、子どもたちにとってとても嬉しいことのようだ。訪問する中・高生たちは、子どもたちの嬉しさを感じとり、自分達の存在意義を確認するということがあるのだろう。自分自身の不確かさを抱えている思春期に実施する乳幼児とのふれ

あいは、そのような意味で意義がある。実施するうえでのいろいろな困難さはあるが、それを乗り越えて実施するメリットを中・高校側は感じている。

## 二、幼小連携のための交流活動

小学校低学年と行う交流活動は、幼小連携という側面をもつ。先述した中央教育審議会で掲げられた課題の中に「幼稚園施設の教育機能の強化・拡大」がある。その重点施策の一つとして「発達や学びの連続性をふんだんにした幼児教育の充実」がある。具体的な内容は、「小学校教育との連携・接続の強化・改善・教育内容における接続の改善」であり、例としては「協同的な学びの取り組みの推進」「人事交流などの推進」「幼小連携推進校の奨励」「幼小一貫教育の検討」があげられている。

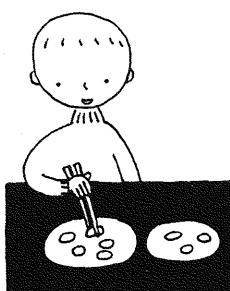
これらの課題や施策は、幼稚園や保育園から小学校へのスムーズな移行を果たす努力をする必要を示

している。その際、基盤となる子どもに対する捉え方は、子どもたちは幼稚教育で完結するわけではなく、その後も発達し、学び続けていく存在であるということだ。幼稚教育側は、今ここで育てていることが、小学校以降にどのような力となっていくかを押さえておくことが求められている。そのためには、幼稚教育側の教員や保育士と小学校教員との交流が、いろいろな形で行われつつある。

例えば、東京都の日野市では、公・私立の幼稚園教員・保育士と小学校教員の代表が一堂に会し、話し合いを重ねながら就学前のコアカリキュラムを作成しようとしている。各々の園の独自性を大切にしながらも、小学校に進学するときに、これだけは獲得しておいて欲しいというものを共通理解し、そのためには各時期にどのようなねらいを設定したらよいのかを話し合っている。この他にも、様々な幼稚園や小学校で幼小連携が作成されたり、

小学校に入学する前に獲得しておかなければならぬ課題などについて、検討されている。

また、人事交流のような形で、小学校教員が幼稚園教員を経験する幼稚園もある。小学校教員が幼稚園の教員を三年間経験するという公立の園のケースカンファレンスに、私が参加するようになってから三年以上たつ。小学校教員が小学校入学前の子どもたちを理解することを目的の一つとして、その園は設立された。小学校からきた先生達は、時間割がないこと、チャイムが鳴らないことに戸惑い、一斉の活動では子どもたちを集中させることに、自由な活動の時間では自分の役割について戸惑うことが多かつた。しかし、小学校に戻つてから、この経験が非常に役立っている



という。子どもを待つようになつた、学習活動以外

での子どもの様子を気にかけるようになったなど、

教員側が子どもに対する見方を変えたり、自分の言

動をえていくことで、なかなか理解できなかつた子どもの言動に対応しようとする。こうした態度に、自分自身の変容を感じるようだ（倉持・井口・

待井 二〇〇三）。

子どもたち同士の交流活動も行われている。一年生の生活科の授業の中では、交流活動の指導のねらいとして、「親切にしようとする心を育てる」「自分の成長に喜びを感じる」などがあげられている。仲良しパーティーを開いて幼稚園や保育園の児童を招いたり、一緒にドッジボールをしたりする活動もある。こうした交流を行うことで、教員間の理解が生まれたり、小学校の実態、就学前の子どもたちの様子を教員が理解することができたという報告がなされている。幼児は、一年生の生活をいま見ることができるで、一年生になることを楽しみに待てるよう

になるようだ。

### 三・交流活動の課題

交流活動を幼稚教育の視点で捉えたときの課題について、ここでは考えたい。

#### 1 交流活動の前提

交流活動に取り組む場合、次のことを前提にする必要がある。第一には、小学校以降の教育段階では時間割があり、融通性がききにくいということである。その点で、相手側の都合にあわせざるをえない側面をもつ。幼稚園や保育園の年間計画の中で、こういう時期に交流活動を行えばより有意義なものになると想定しても、なかなか相手との調整が難しい。

第二には、同じ中・高生と頻繁に交流活動を実施することは不可能なので、どうしても単発的な交流になってしまふということである。子どもたちにお

もちやを作つて持つてきてくれたり、紙芝居を見せてくれたりするイベント的な一日に終わってしまう可能性がある。継続的に交流をもつことができれば、交流が積み重なり、工夫や省察も生まれやすいが、単発的な交流を、その後の子どもたちの生活にどのように位置づけていくかは、なかなか難しいところがある。

第三は、いろいろな生徒たちがいるということである。子ども好きな生徒もいれば苦手な生徒もある。こちらが予想もしないような行動をとる生徒もいるだろう。そうした生徒たちと子どもたちはかかわりをもち、思いもよらない経験をすることもあるかもしれない。

このようなことが前提となる交流活動で、子どもたちはどのような経験ができるのか、考える必要がある。また、中学以降の学校種と交流する場合に、どのような授業でやってくるのか、目的は何なのかは、事前に聞いておくべきである。総合

学習できているのか、職場体験なのか、ボランティアなのか、家庭科の授業としてしているのか、受け入れる側は明確ではない。しかし、授業によつて目的是違うし、生徒たちの事前の学習は異なつてくれる。それが、交流当日の生徒達の動きに影響を与えるだろうし、子どもたちが経験することも異なつてくるだろう。

また、幼稚園教員も保育士も、学校種は異なつても生徒たちからすれば「先生」である。「先生」として、彼らの教育効果をあげるために役割を担つていい。交流活動の目的を把握し、それに応じたかかわり方ができることが「先生」としての役割の一つだろう。

## 2 交流活動の中の子どもたち

交流活動の効果は、幼児教育施設に行く側については、実証されつつある。しかし、幼児期を生きる子どもたちにとって、どのような経験になり、それ

が学びや発達に果たす役割については不明確なままである。

交流活動が子どもたちにとって楽しい活動であることは確かである。少子化・核家族化の中で、子どもたちは家庭の大人と園の同輩とのかかわりを中心とした生活をしている。交流活動を通して、「楽しい」という経験に裏付けられた少し上の世代とのかかわりが可能となる。それが子どもたちの世界を広げていく結果につながるだろう。

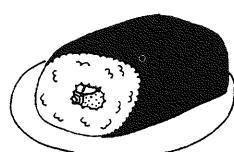
一方で、交流活動では、幼児の方が低年齢である場合が多く、赤ちゃん扱いされてしまうことが多い。幼児が年長であれば、いろいろな事に先頭立て取り組み、幼稚園や保育園のリーダー的存在として主体的に考え動くことが求められ、それができることに自信を深める時期である。それが、交流活動では、「教えてあげる」「親切にしてあげる」対象とされる。そのことが、彼らにとってどのように受け

止められ、どのような経験になつているのだろうか。

子どもたちが交流活動で経験していること、そしてそれが子どもに与える影響について、短期的・長期的に検討していくことが必要だろう。

### 3 交流活動の中の教師

幼稚園や保育園などの教育施設は、年少の頃からの仲間との関係が維持されていることで、子どもたちが安定して安心して生活することを可能にし、それが子どもたちの成長発達につながっていく。しかし、関係が固定化され、子どもたちの異なる側面を引き出すきっかけがなかなか見いだせないことがある。それが、交流活動によって、子どもたちが日常の保育の中で見せな



かつた側面を引き出す機会になる場合が生じる。保育者とのかかわりの中で自分を出していなかつた子どもが、年齢の近い小学生や中学生とのかかわりの中で、自己発揮している姿を見せるかもしれない。

それを自分たちの保育の問題と内向的に反省するだけでなく、その子が保育の場面で自己発揮できた良いきっかけになつたと捉え、それ後の保育でどのようにつなげていくかを考えいくべきである。交流活動のメリットの一つは、このようにいろいろな人とのかかわりの中で、子どもの新たな側面を引き出せることだろう。

また、交流活動は、中・高校側の立てた内容によつて、進められることが多い。しかし、幼児教育施設側も、交流活動を通して、子どもに育つてもいいたいねらいがある。教師は、交流活動の中で、子どもたちが経験していることをしつかりと見つめ、その後の保育につなげていく役割を担つている。幼

児が交流活動の中で様々な年代とかかわりつつ、児時代をしつかり生き、未来につながる力を獲得するために、交流活動をどのような活動にしたいのか、幼児教育施設の側が積極的に発信していく必要があるだろう。

（東京学芸大学）

#### 文献

花沢成一・松浦淳「男女青年における対児感情と乳児接觸経験との関係」日本教育心理学会第28回総会発表論文集 356—357 一九八六年

倉持清美・井口眞美・待井ナオミ「小学校教諭にとつての幼稚園教諭体験—「遊びを通しての指導」の理解を巡って」東京学芸大学紀要 第55集73—82 二〇〇三年  
資料

平成十七年中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化をふまえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」

## 田口恒夫先生追悼

### 田口先生 ありがとうございました

増井 美代子

田口先生、先生が生きていてくださるというだけで、嬉しくありがたく思っていた人は数しれないことでしょう。もちろん、私もその中の一人なのですが、追悼文を、とお勧めを受けて以来ずっと困っています。

あまりにもいろいろな思いが次々と湧いてき

て、何をどう申し上げたらいいのか、また言葉にすることでも心のうちが嘘になつていくような気もして、迷つばかりです（「気の毒だねえ、いいんです、そんなの書かなくたって」、というお声がはにかんだような笑い声とともに何処からか聞こえてくるようです。そう、先生はご自分のため

に他人を煩わせないようになると、とても気を使われる方でした。そしてご自分では他人のために勞をいとわず、さりげなく氣を使つてくださつて。そのため、ともすると、未熟な私たちは勘違いして、自分勝手に楽なほうへと流れがちになり、反省することもしばしばでした。

私が初めて先生のご講義を受けたのは、大学二年生の後期の集中講義でした。言語障害、言語治療という耳慣れない言葉がなんだかとても気になつたのをおぼえています。

三年生になつた時、先生は専任教官として赴任されました。微音堂（講堂）の舞台の裏が研究室になり、たまにお訪ねすると先生は歯切れのよいおしゃべりと同じように身のこなしもできぱきとスマートでした。そのせいか、当時、私たちにとって多少近寄りがたい存在でもありました。

それでも、研究室に出入りさせていただいていた私たちは事情の許す限り先生の学外での講演や講義にもよく連れて行ってもらっていました。

家政学部大学院の建物ができて研究室もそちらに移つた頃には、内地留学の先生方や研究生も増え、相談を受け入れる体制も膨らんできていました。その頃、先輩の花上洋代さん（現姓高橋）や中田雅子さんと「今日は先生笑つたね」とほつとしでおしゃべりしたことや、ケース会議で、教科書を一生懸命読んでインテイクをしたにもかかわらず「一体その質問をすることに何の意味があるのですか！」とばつさりと切られるように言われて半べそをかいたことを思い出すと（もちろん、今思えば深く考える余裕もなく、通り一遍に面談することで精一杯でしたので、そう言われても当然のことだったのですが）、先生はその当時もまだ、私たちにとつては少々怖い存在だったよう

思います。臨床場面を広く深く読み取られ、鋭い指摘をされることがしばしばだったからでしょうか。

ある時、「私は皆さんに学んだねえ。最初はこのお嬢さんたち（私たち女子大生）は、ただ子どもと遊んでばかりいてどうしようもないなあと思っていたけど」とおっしゃったことがあります。どういうことですか？ とお聞きすることはできなかつたのですが、それは、もしかしたら、講義の中で「脳性まひの子どもに泣かせながらでも厳しく訓練させて、その結果、足が何センチ上がるようになったとかいうのはどれほどイミがあるのか疑問に思つていた」というようなことをおっしゃつていらしたことと関係があるのかなと思いました。つまり、子どもの意思や感情にお構いなく、治療だ訓練だと押し付けていて良いのだ

ろうかという疑問に、やつぱりそれで良いというはずはないんだ！ と確信をもたれた（人がより良く成長していくための真髓を見抜いておられた）ということなのではなかつたのでしょうか。

今、こうして書きながら先生は根っから、人を人として尊重して生きていらした方なのだとあらためて感じ入り、手を合わせたくなります。

お昼休み、研究室はなんとなく先生を囲んで昼食をとるのが常でした。先生はいつも奥様の愛妻り笑いの渦が起つたり、先生のお人柄をより知る機会でもありました。お宅の近くで採れている葉っぱをはいで皆にくだり、キャベツつてこういう味ですよ！ と味わせてください。冬

の寒い日、ストーブの上に洗面器いっぱいの甘酒を作つてご馳走してくださつたこともあります。

相談の電話をかけていらした方が延々と話されていると、『多忙中でも丁寧にお付き合いされ、時にはお弁当も中断されたままになつてゐる様子を目の当たりにして、臨床家としての姿勢を思い知らされた感じがしました。誠実に、来る者は拒まず、去る者は追わず、という感じに見えました。またそれは、先生ご自身の生き方そのもののようにも思えました。

昭和四十五年当時、私は新潟の短大に赴任しておりましたが、その頃頂いたお手紙に「二歳、三歳とかになつてから自閉症、情緒障害児などといふレッテルを貼られてしまつた氣の毒な子どもた

ちの正体について、今おもしろいことを考えてします。今いわれてること、今までいわれてきたことは全部おかしい、見当はずれではないかと。本当はこれは発達、学習の障害なのであって、も

ともとのわけは新生児期にすでにあるはずの原始的な、反射の中のある面にdefectをもつて生まれた子なのである。つつかれても表情筋を動かす反射が欠けているとか、あやすと喜ぶ、という現象が起ころるのにその基礎として必要な反射が欠けているとか、そして一年、二年と経つうちに自閉的とか情緒障害とか、その時になつて初めて出会う『専門家』にレッテルを貼られるような行動をする子どもに育つてしまつた、という話。今にヤツパリそうだったのか（当たらずとも甚だ近かつた）ということがきっとわかりますよ」と書いてくださいました。

この“お見通し”が、数々の臨床を通じて実感

され、先生が、遺言のつもりで、と自費出版な

さつた『今、赤ちゃんが危ない・母子密着育児の

崩壊』(二〇〇〇年六月)へと磨かれ凝縮されて

いつたのでしようが、本当に、どうしてそんなす

ごい事がおわかりになるのでしよう、と感嘆を超

えてため息が出てしまいます。

今までこそ、この“田口理論”も受け入れられ

るようになつてきていると思いますが、当時先生

はとても歯がゆい思いをなさつていらしたので

しょうか、ノーベル賞を受賞なさつたティンバー

ゲンの本に出会われた時、「涙が出そうなほどい

す」と手紙をくださいました。きっとご自分と同

じように考えている人がこの世の中にいた！ と

感激なさつたのでしよう。イギリスに行ってティ

ンバーゲン先生にお目にかかるときの先生の感

極まつたご様子は今でも忘ることはできませ

ん。

身をもつて生き様を教えてくださつた田口先

生。

子どもの、人の、世の中の、平和と幸せを願い

続けられた田口先生。

本当にありがとうございました。

私は先生がいらっしゃらなくなつた、というこ

とがまだ実感できません。いつまでも今までと同

じようにいらしてくださいなる気がしてなりません。

先生を尊敬し、お慕いしていた方々、皆それぞ

れに、教えていただいた事を大切に生きていかれ

るに違いないと思います。

私も私なりに大切に生きていきます。心の中に

生きていてくださる先生に時々問い合わせながら。

ありがとうございました。

# だけのこ幼稚園とハジメのおつかやん(11)

庄籠道子しょうじごもり

## 横取り事件の巻

この前入園したと思ったのに、もう三月。あと二週間で卒園だ。ぼくたちは、毎日、せっせと遊んでいる。

じゅんが先生に言いにいった。

「先生、ももちくんが、ぼくのつみ木、取った」

「ぼくのつみ木って、あれは幼稚園のつみ木やで」  
籠先生に言われてじゅんが半べそその顔で先生をにらみつけた。

「ああ、ごめん、ごめん。そういう話じゃないんやね。どうしたつて？」

と、籠先生はじゅんといつしょにつみ木置き場に行つた。

「ももちくん、じゅんくんのつみ木、取つたん？」  
ももちは黙つてかぶりをふつた。せつせとつみ木  
を遊戯室のまん中に運んでいる。

「取つてないって言つてるねえ」

「取つた！」

と、じゅん。

「えつと、じゅんくんは、どこでどないしょつた  
ん？」

籠先生はじゅんに聞いた。

「あんな、ほくがな、ここでな、つみ木をこうな

……」

じゅんは、つみ木置き場に行き、長方形のつみ木  
をかかえて、遊戯室のまん中にむかって歩きはじめ  
た。

「ああ、つみ木を運んでたんやね」

「うん。そしたらな、ももちくんがな、取つたん  
や」

なるほど。じゅんが使おうと思つて運んでいたつ  
み木をももちは横取りしたわけだ。ももちは虫なら  
虫しか見えない子だから、つみ木しか見てなかつ  
たんだろう。つみ木置き場にあるつみ木も、誰かが  
持つてるつみ木も、ももちにとつて同じなわけだ。  
ももちは横取りしたつもりはなかつたから、かぶり  
をふつたんだ。なるほどね。籠先生は妙に納得し  
た。しかし、納得している場合じやない。じゅんに  
してはたまらない。そりやそうだ。せつかく運んで  
るのに、横取りされちゃかなわない。えつと、まず



は確認だ。

「つまり、じゅんくんが使おうと思つて、こうやつて運んでいたつみ木を、ももちくんが、横から取つたわけね？」

籠先生はじゅんに聞いた。じゅんは

「ううん」

と、首を横にふつた。えつ？ 違うの？ 横取り

されたんじやなかつたの？ 篠先生はびっくりし

た。じゅんは続けた。

「違う。前から取つたの」

「……あつそ。うか。横から取つたんじやな  
くて、前から取つたわけね。うか、うか。なる  
ほどねー」

籠先生は、にやにやしながらうなずいている。

「ももちくん」

籠先生はももちを手招きして、つみ木置き場に置いてあるつみ木と、誰かが持つてあるつみ木の違い

について、ももちにお説教をはじめた。だけど、に  
やにやするばかりで、まるで迫力がない。籠先生ら  
しくない。変なの。

お弁当を食べる用意をしている時に、まきが籠先生に言いにいった。

「先生、目が痛い」

籠先生は、まきの目を見て言った。

「ごみでも入つたかな。ちょっと赤いかねえ、お  
水で洗つてみようか」

水道の所に行つた。

「おでてを丸くお皿みたいにして、お水入れて、  
まきはやつてみた。

「どう？ まきちゃん。よーなつた？」

「ん、よーなつたかなあ。よーわからん  
「うか、おべんとうは、食べれそう？」

「うん」

「じゃ、食べよ。また、痛かったら言うてね」

まきは時々首を振りながらお弁当を食べた。お弁当を食べてしばらくすると、また、まきは籠先生のところに行つた。

「やっぱり痛い」

籠先生は救急箱から目薬を出して、まきの目にさ

した。

「どない?」

「うーん……いいみたいかなあ」

どうもいまいちすつきりしないらしい。まきは首

をかしげながら、むこうへ行つた。

しばらくして、げた箱でくつをはきかえながら、まきがまた籠先生に言つた。

「やっぱり、まだ痛い」

籠先生はうでを組んで考えた。

「うーん、おかしいねえ。病院に行つたほうがい

いかもね。幼稚園から帰つたら、お母さんに話してみて……で、まきちゃん、どんなふうに痛いの?」

「どんなふうつて?」

「えつと、チクチクする?」

まきは首を横にふつた。

「ううん」

「じゃあ」

籠先生は考えた。目が痛いときつてどんなふうに痛いんだっけ。えつと、そうだ。ごろごろするときがあるよね。

「じゃあ、ごろごろするの?」

まきは、下ぐつをはき終わつて立ち上がり、籠先生の顔を不思議そうにじつと見上げた。そして、首をかしげながら言つた。

「…………音はしないけど…………」

そう言うと一輪車にむかつて歩いていつた。後にまきは、籠先生がひとり立ちすくんでいた。

## 自転車事故の巻

たけのこ幼稚園には、自転車が六台ある。「いらなくなつた自転車はありませんか?」

と、竹田園長先生がたのんで、たけのこ公民館便りに書いてもらつたらしい。そしたら、あれよあれよと集まつたのだそうだ。

ぼくたちは、雨さえふらなければ、自転車を乗りましたわして遊ぶ。園庭と校庭はつながつてゐるから、小学生がない時は、たけのこ小学校の校庭も自転車で走る。広いから、とても気持ちがいい。

園庭で自転車レースをする時もある。とびばこのふみ板を二つつなげて山を作る。三角コーンを置いてくねくね道を作る。両脇に水の入つたペットボトルが並んだ狭い道。ペットボトルにぶつからないように行くのは、なかなかむずかしい。ひもがひらひらついたアーチもくぐれる。

さて、その日は、もうすぐ卒園式という日だつた。

ラジオのおっちゃんが來た。ラジオはトランポリンのすみに置いた。赤い自転車に乗つてゐるとしなりの前に立つて、何か言つた。としなりは自転車を降りて、おっちゃんに替わつた。おっちゃんが、この赤い自転車が好きなことをぼくたちはみんな知つている。おっちゃんは、この赤い自転車以外の自転車には決して乗らない。

赤い自転車は、幼稚園の自転車の中では一番大き

かつたが、それでもやはり子ども用の自転車な

で、おとなのおつちゃんには小さかった。だけど、

おつちゃんはいつも猛スピードでこの赤い自転車をこいだ。

その日は自転車レースはしていなかつた。朝、ほくたちがリレーをしたから、トラックの白線が残つていた。

おつちゃんは、その白線に沿つて自転車をとばしてゐた。何周目だつただろうか。カーブを曲がりきれなくて、おつちゃんの自転車がこけた。

「おつちゃんの自転車がこけた！」

りょうたが叫んだ。

おつちゃんは立ち上がりつた。ほっぺたから血が出ている。たくさん出でている。

竹田園長先生が、ティッシュペーパーの箱を持つて走つてきた。後ろから、籠先生が救急箱を持って走つてきた。

走つてきた。

竹田園長先生が

「おつちゃん、血が出とうよ」

と言つて、おつちゃんのほっぺたをティッシュでふこうとした。

「あああっ！」

おつちゃんは、大声を出して園長先生の手を払いのけた。

「おつちゃん、血が出とんやで。ふいて、消毒せな」

籠先生もふこうとしたが、おつちゃんは、払いのけた。

騒ぎを聞きつけて、小学校の教頭先生が走つてきた。おつちゃんは、自分の手でほっぺたをさわり、手についた血を見て

「おつ」

と、びっくりした。

「ほら、血がようけ出とるやろ。な。ふこうや」

教頭先生がティッシュでふこうとした。

やつぱりおっちゃんは払いのけた。

「あああ！」

おっちゃんは何か言うと、歩き始めた。「わしに

さわるな」って言つたのだろうか。ぼどつとほっぺたから血が地面に落ちた。

おっちゃんは、トランポリンにラジオを取りにくくと、そのまままたすた帰つていつた。

その日の昼頃、

「おっちゃん、だいじょうぶだつたかなあ。家の

人、びっくりしはつたやろねえ」

先生たちがしゃべつている。たつやは窓の外を見た。

「先生、おっちゃんが來たで」

みんな、あわてて見にいった。

「おっちゃん、けが、だいじょうぶ？」

おっちゃんは、片手をあげて  
「おう、おはようー」と言つた。

元気そうでよかつた。

おっちゃんのけがしたほっぺたには白いものが  
はつてあつた。ガーゼだらうと思つた。しかし、よく見てびっくりした。

おっちゃんのほっぺたにぺたつとはつてあつたもの、それはサロンバスだつた。

わー、はがす時、痛そう。

それから、何日かして、たけのこ幼稚園では卒園式があつた。ぼくたち十八人は卒園した。

卒園式の日にも、もちろんおっちゃんは幼稚園に來た。卒園式を庭からちょっと見ていた。ぽかぽかと暖かい日だつた。

(保育研究グループ はるにれ)

## 私が通った幼稚園・保育園(9)

### 一学期だけの幼稚園

入江 礼子

#### 五十年前の幼稚園児として

私が神奈川県の大磯町立大磯幼稚園に入園したのは今からおよそ五十年前の昭和三十一年（一九五六年）のことです。昭和三十一年といえば初めての幼稚園教育要領が定められた年ということになります。

子どもの足で歩いて十五分はたっぷりかかるこの園に近所の友だちと四人で通いました。当時のことゆえ当然一年保育です。私はあやめ組でした。一年保育のクラスは四組あつたよう記憶していますが、自分のクラスの人数が何人いたのかは全く記憶にありません。ただ二年保育のクラスが一クラスだけあって、このクラスの子ど

もたちがあちこちのクラスに神出鬼没で自由に過ぎていて、ということを妙にはつきりと覚えていました。丁度現在の幼稚園での三歳児の位置と重なるようにも思います。

### 待ち遠しかつた入園

五月生まれの私は幼稚園に入園できるのをとても楽しみにしていました。近所に同じ年の子どもだけでも五人

いて、遊ぶことには事欠かなかつたのですが、それでも幼稚園に行かることは新しい世界が開けるように思つたのでしようか、待ち遠しくて仕方がありませんでした。

「幼稚園には歩いて行くから、雨の日に傘が一人で差せないと行かれないのでしょ。傘を開いたり閉じたりが自分でできるように練習しなさいね」と母に言われ、新しい傘を渡された日のことを今でもはつきりと覚えていました。当時の傘はワントッチではありません。開けるのは

何とかなるのですが、すばめるときにどうしても指の肉を挟んでしまい、なかなかうまくいきません。何度も練習してやつと肉を挟まないで開閉できたときは、これでやつと本当に幼稚園に行かれるのだと誇らしく思いました。もちろん幼稚園に行くのは近所の子どもたちと一緒に現在のように親子で登園ではありません。ですから、自力で傘を差したりすばめたりできることは幼稚園に通常の必須事項だつたのです。

### 新しい友だち

入園式の日。その式の記憶は全くないので、母と一緒に帰りがけ、たまたま近所の友だちではなく同じ「あやめ組」になつたM子ちゃん母子と帰つたこと、東海道線の線路の踏み切りのところで別れたことを覚えています。クラスが一緒に帰り道が一緒、おまけにどうやら母親同士も話が合つたということもあってか、帰りはほとんどM子ちゃんと一緒に帰るようになりました。入

園して間もないある日、私は

ちは二人とも母のことを「お

かあちゃん」と呼んでいるこ

とに気がつきました。当時の

私は近所の友だちと遊ぶ時は

母のことを「お母さん」と呼

び習わしていました。間違つても「おかあちゃん」とは

言いませんでした。その呼び方が場にそぐわないことを

感じ取っていました。それがM子ちゃんととの会話の中で

は思わず、この「おかあちゃん」という言葉が飛び出し

てしまつたのです。それを聞いたM子ちゃんは「私もお

かあちゃんって呼んでるの」といつてニコッとしまし

た。この時から私とM子ちゃんは「おかあちゃん」と心

置きなく口に出して遊べる仲となりました。近所の友だ

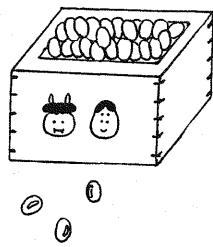
ちという地理的に限定された枠を出て、「気が合う」と

いうことの意味をM子ちゃんとの出会いから学んだとも

いえます。それから五十年近い年月が経ちましたが、私

たちは今でも友だちでいます。

### 断片的な思い出



幼稚園での思い出は本当に断片的です。でも不思議なことにこの五十年間何回も思い出されることでもあります。まず砂場の場面。私は砂場で何をして遊んでいたのかは覚えていないのですが、気づくとM子ちゃんと二人だけになつていました。すると遠くの（そんなに広い園庭ではないのですが、そんな風に感じました）保育室前のコンクリートのタタキから担任のS先生が「もどつてらっしゃーい」と私たちを呼んでいます。「あつ、お集まりだ！」と私たちは急いでお部屋に向かいました。それからどうしたのか、記憶はそこでぶつりと切れています。しかし、この「お集まり」という響きに私は自分が幼稚園にいるということを実感していたように思います。

憶しています)、ブランコはみんなに人気の固定遊具で

した。子どもたちは保育室から走ってブランコに向かい

ます。そして長い行列ができます。「もう、順番だよ。

十数えたら代わるんだよ」と誰ともなく決められたそのルールの多くの子どもたちは従っていました。私も自分の番がくるまで何回も「いーち、にーい、さーん、しーい、ごーお……」と大きな声を出して数えていました。

でもF君になるとF君は十数え終わっても一向に降りる気配がないのです。誰かが「もう、順番だよ。十数えたのに。F君、降りてー！」と声をかけるのですが、F君は決まって「やーだよ！」という返事を返してきます。「ずるい、ずるい!!」の大合唱になつても、降りてくれません。そのうちに「お集まりですよー」の声が聞こえきます。「あーあ、またブランコに乗れなかつた」絶対に譲ってくれないF君の存在から、私は「わがまま」という言葉を知りました。それから「ずるい」という言葉とそれに伴つて自分の心のなかに沸き起つたあ

る感情も。

### お誕生会の「ゴム毬

昭和三十一年といえば、まだ高度経済成長以前の時期でもあります。当然「もの」は豊かではありませんでした。そんな時代に幼稚園のお誕生会でもらつた「ピンクのゴム毬」のことを思い出すると、その時の何ともいえない誇らしさと嬉しさが蘇ってきます。お誕生児はみんなの前に出て、一人ひとり先生から紹介され、祝福されます。そして男の子には「白のゴム毬」、女の子には「ピンクのゴム毬」が手渡されました。ゴム毬は一つずつ網に入っています。それが特別のようで嬉しく、大事に大事に、これも誕生日も一緒だったM子ちゃんと一緒に持つて帰りました。ソフトテニスのピンクボール版といつた大きさのこのゴム毬は、以後私の毬つきの友となります。当時の降園後の女の子の外遊びといえば毬つき、ゴムとび、大縄跳びなどが代表的なものでした。で

も「ピンクのゴム毬」を持つている人は近所にはいません。私は来る日も来る日もこの「ピンクのゴム毬」を持って外遊びに出かけました。よほど使い込んでしまつたのでしょう、ゴム毬からは段々に空気が抜け、へこむようになつてきました。私は母に頼んでお湯を沸かして貰いました。そしてお湯を洗面器に入れ、そこにゴム毬を浮かべて膨らましたのです。しかしそんな努力も空しく、遂に毬つきには使えない日がやつてきました。なんだか幼稚園と縁が切れてしまつたような、そんな寂しさを今でも思い出すことができます。

### 幼稚園を中退

「幼稚園と縁が切れてしまつたような」と書きましたが、実はピンクのゴム毬がペコペコに凹んでしまつたその年の秋、私はもう幼稚園児ではありませんでした。その年の夏、祖母の家に泊りがけで遊びに行っていた私は午後になると熱が出るようになつてしまつたのです。診

断結果は軽い結核。幼稚園を続けることは叶いませんでした。母と一緒に最後に幼稚園の先生に挨拶に行つたことも覚えてますが、特に寂しかつたという記憶はありません。しかし家の生活を中心となると待つていたものは「退屈」と付き合つことでした。もともと外向的な私はひとりでじっくりというより、友だちと外でいるとのほうが好きでしたから、時間を持て余し退屈している私をみた母は月刊誌の「小学一年生」をとつてくれるようになりました。それが届く日、十一時に近所の文房具屋さんに配達されるのですが、何回も何回もその店先にのぞきに行きました。それ程心待ちにしていたのです。幼稚園ではキンダーブックを購読していましたが、「小学一年生」はそれに比べると厚く、読みでもあり、次の月に次の号が出るまでの間繰り返し繰り返し読み、内容はほとんど暗記してしまうほどでした。幼稚園での生活が中斷されてからの私の生活はこうして「退屈」と「本を繰り返し読む楽しさ」「本を待つ楽しさ」に彩ら

れていきます（これを彩りといつてよいとすればの話ですが）。それと今から思うと「白昼夢」とでもいすべき想像の世界にはまつていったようにも思います。何しろ近所の友だちはみんな少なくとも午前中は幼稚園に行ってしまっているのですから、ひとりで何とかしなくてはなりません。家には四歳半違いの妹がいましたが、同年齢の友だちの代わりにはなり得ません。

そんな状況でしたが、それが後の私の育ちにとつて、ずっと幼稚園に行っていたのとは違う影響を与えたように思います。もともと外向的な方で、幼稚園に行つたことでそこにより拍車がかかったのですが、中退という事態は、外向性に一時的にストップをかけ、むしろ影に隠れていた内向性が顕在化して、自分なりの核を「退屈」を滋養として育てていったように思うのです。

そんな生活が日常になつた頃、あの「ピンクのゴム毬」はペコペコに凹んでしまつたのです。

### 幼稚園児であること、幼稚園児でないこと

このように私の幼稚園時代は約一学期と短いものでした。ここで開きかけた心の蓄は、幼稚園中退という事態でいつたんその動きを止めます。しかしその退屈を伴つた内向があつたからこそ、それがいわゆる「溜め」の部分となつて、後にくる小学校生活の出発がより鮮烈でなんでも珍しくあるのは吸收のみという生活を導いたように感ずことがあります。

もともと一年保育でしたから、幼稚園に行く心の準備は万端でした。さらに幸か不幸か病気中退ということが結果として小学校生活に向けて内なる心を耕す時間を保証することとなりました。

今思うと「待ち」や「溜め」のやたらと多かつた幼児期ですが、私にとつてはこの二つが今現在、幼稚園の意味を考える原点になつているように思うのです。



存在として愛しむまなざしの中に  
は、大人の側のゆきづまりを打開し  
ようとするエゴがあるともいえる。

田中三保子先生の、薬局の待合室

一年中でもつとも寒い一月。幼児

の頃の私にとって二月は、お正月の

特別な空気はすっかり消えうせ、雪

でも降つてくれれば楽しいのにと、

何かを待つてゐる月だつた……よ

な気がするのだが。実際のところは

どうだつたのだろう。相馬御風の

「春よ來い」（大正十二年）のみよ

ちゃんのよう、あたたかい「おん

も」に出るのを純朴に夢見ていたの

かというと、それにもどうも違和感

がある。あれは、歩きはじめのみよ

ちゃんに託した大人の思いだつたの

か。御風は「良寛＝童心の人」とい

う伝説を作り出した主要な人物とさ

れる（河原和枝）が、子どもを純な  
る」と報道される児童期の子どもた  
ちをどうにか救いたい、という祈り

のようなものを感じた。子どもの立

場に立つて考へるといふことと、大

人が子どもへ願いや祈りを抱くこと

とは本来切り離せないのではないだ

ろうか。そんなエゴと、危ないエゴ

とを区別するのは難しそうだ。子ど

印刷所	発行	平成十八年二月一日
編集兼発行人	浜口順子	（一一〇〇六年一月号）
発行所	日本幼稚園協会	定価五五〇円（本体五四四円）
図書印刷株式会社	〒112-8620 東京都文京区大塚一丁目一	お茶の水女子大学附属幼稚園内
株式会社 フレーベル館	〒113-8611 東京都文京区本駒込	

六一一四一九

☎〩三一五三九五一六六一三（営業）

振替 〇〇一九〇一一九六四〇

☆ 本誌の購読のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

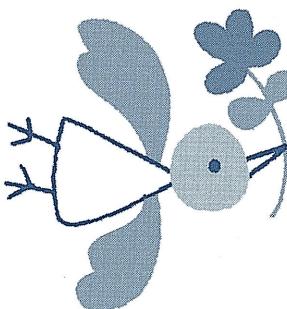
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!

# 子どもの心が かがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良 著



21×15cm/256頁  
定価1,365円(税込)

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者への優しさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



## ●目次から

- 第1章 ハマユウの花のように  
—わが半生から学んだ幼児教育
- 第2章 幼児との温かい心のふれあい  
—保育者のひとことが子どもを伸ばす
- 第3章 『読み聞かせ』を楽しむために
- 第4章 保育の悩み相談 Q&A
- 第5章 スピーチの基本ABC
- 第6章 月別『書き出し』文例集

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

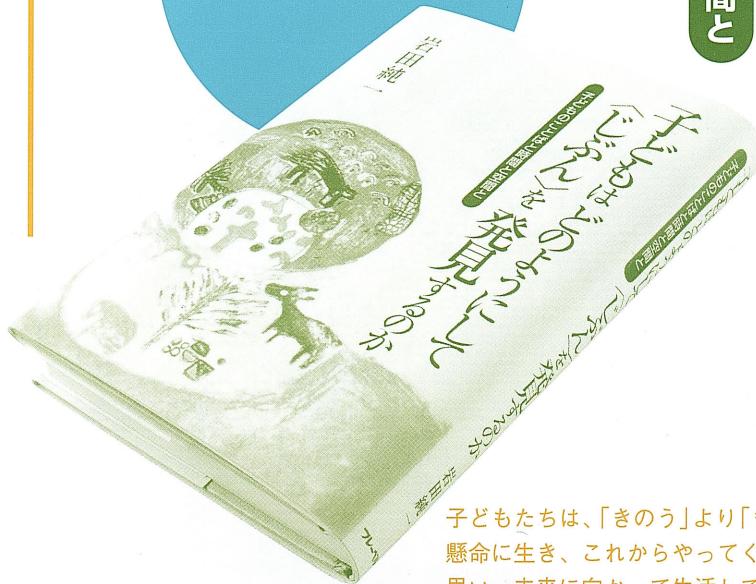
最 新 刊

岩田純一 著

子どものことばと時間と空間と

# 子どもはどのようにして 「じぶん」を発見するのか

子どもは、こんなにもいきいきと  
「あした」を思い描いて、  
自己を育てていく…



19×13cm 232頁  
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を懸命に生き、これからやってくる「あした」を思い、未来に向かって生活しています。

では、子どもは生まれて成長していくなかで、「きのう」の〈じぶん〉は「きょう」の〈じぶん〉と同じであり、「あした」も同じ〈じぶん〉が続いているという認識を、いつ、どのようにして獲得していくのでしょうか。豊富な保育のエピソードをとりあげて、子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。